

第1回 NITS 大賞（平成 29 年度）エントリーシート

秋田県立仁賀保高等学校

C-19

【活動名】 学習（指導）強化月間

解決すべき課題：

主に次の2点を課題として捉えた。

2学期中間期の油断や怠慢による成績不振生徒の増加

日常業務過多による教員の授業改善意識の低下

目的や背景：

本校では、基礎的・基本的学力が低い生徒が多く、学習に対する意欲や関心を持っていない生徒も少なくない。このような生徒たちは特に気が緩みがちな2学期に成績不振となることが多く、長年の懸案であった。この状況を解決するための方策を考えるにあたり、「まずは毎日の授業にしっかりと取り組み、理解させることが重要。そのために教師の授業力を上げる」との結論に至った。そこで、生徒にとってより魅力的な授業、そして、わかる授業づくりを進めるため、11月中旬から2学期末考査までの1ヶ月間を授業改善のための期間として研修を進めることにした。この1ヶ月間は先生も生徒も一緒になって頑張る期間ということで、生徒にとっては「学習強化月間」、私たち教師には「学習指導強化月間」とし、あわせて「学習（指導）強化月間」と表記している。そして、平成23年度以降、毎年同じ時期に「学習（指導）強化月間」を設定し、今年度で7回目の継続した活動となっている。

活動内容：

まず初年度(H23)は、それまで個々に実施されていた授業改善に関する業務を期間中にまとめ、互いに有機的に作用するように工夫した。さらに教員用授業改善チラシの作成や学習目標の教室掲示などの新たな企画も立ち上げた。

生徒による授業評価アンケート・・・A．生徒が自身の取り組みについて答える項目、B．該当の授業について評価する項目、C．AとBの項目はリンクしており、それを利用した重み付け集計、という3段階の授業評価を強化月間直前に実施し、授業改善のための個人目標の策定に使用する。

学習状況調査・・・家庭学習時間や授業への取り組みなど、クラス・学年・全体で集計し、毎年の生徒の傾向や学習状況を把握する。

HR教室目標掲示・・・学習強化月間中における学校全体の目標を拡大印刷にて教室に掲示する。学習意欲を喚起するようなデザイン、心を落ち着かせるような美しい配色などを心がけ、生徒に対し視覚的に訴える。

フリー授業参観・・・通常時の授業の参観だが、参観相手3人を教務が強制的に割り振り、期間中に参観する。対象クラスや科目（つまり参観日）は自由だが、参観相手を自分で選べないことで予想外の発見につながることも多い。また参観後の意見交換等は行わず、自分が勉強になったと思うことや他の先生に紹介したいと思うことのみを教務に報告し、後に毎年発行の研究紀要で情報共有する。生徒の学習意欲向上の利点も認められる。

校内授業研修会・・・強化月間中の授業改善の成果として、指導助言者や近隣中学校・高等学校の教員などを招聘・招待して研究授業を行う。

教員用授業改善チラシ・・・授業技術や教育情報の共有を図るため、1週間に1枚のペースで先生用のチラシ（計4～5枚）を制作・配布している。前年度のフリー授業参観で得られた感想等をベースに、学校重点課題対策委員会（4年部）の教員と管理職で作成している。そのためベテラン教員から若手教員への技術の伝達という側面もあるが、それだけに紙面は堅苦しくならないように、そしてどんなに忙しくても読みたくなるように、デザインやユーモアを意識して作成している。

すべての企画で毎年少しずつ改善を続けているが、平成27年度には「生徒の活動が少ない」ということから生徒用の企画を新設した。また、この年から強化月間外ではあるが、指導主事学校訪問の日を「研究授業デー」として新設し、すべての教科で年1回以上の研究授業を行うようにしている。

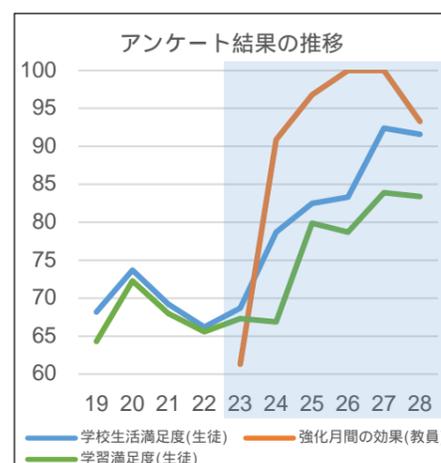
考査直前要点整理ペーパーコンクール・・・まず生徒一人ひとりが任意の科目を一つ選び、その試験範囲の学習内容の要点をA5用紙1枚にまとめる。そしてクラス全員分の用紙を大きな1枚の台紙に貼り付け廊下に掲示する。生徒たちは友人の作った要点整理ペーパーを読むことで互いに刺激を受けながら、考査のための知識を得る。もちろん他クラスの掲示を見てもかまわない。教員はもちろん生徒にも好評で、皆積極的に取り組んでいる。

指導案検討会・・・平成28年度から「研究授業デー」などの研究授業の前に参観予定者全員が参加する検討会を設けた。これにより当該教科の教員では気付かないような指摘や質問が出たり、授業参観時や協議会においてもより深いレベルで参加できるようになったと好評である。

活動の成果：

【教員】 まず、授業改善に対する意識が格段に高まった。そのため強化月間期間外においても各自で授業改善に取り組むようになっている。よって板書や発問などの基礎的な授業技術はもちろん、協働的・能動的な学習などについても関心を持つ先生が増え、早くからアクティブラーニングなどの新しい概念を授業に取り入れることができている。また、指導案検討会や研究授業の協議会においても積極的に意見交換が行われるようになり、教科の枠を超えた研修がより高い成果を上げることにつながっている。また、学校評価（教員用アンケート）によると「学習（指導）強化月間は授業改善に役立っていると思う」の項目は、毎年ほぼ100%でその効果が実感されていることが分かる。

【生徒】 教師の頑張りや生徒たちにも伝わり、生徒の授業に対する姿勢が明らかに変わった。また授業評価アンケートや学習状況調査によると、「授業が分かりやすい」、「楽しい」などの声が増え、学習（授業）の満足度が急激に上昇した。同時に学校生活についての満足度も上昇し、これらの相関関係も確認できる。学校評議員や地域中学校の教員が授業参観した際には「以前と授業の雰囲気が大きく変わった」という声が多く聞かれるようになった。



アピールポイント（アイデア）：

最も大切なことは、「組織として全員で取り組む」ということである。そこで「仁高教員が互いに連携し、授業改善を推進する」というコンセプトを提示し、本校教員全員が教育活動全体に貢献していることを強調し、それを実感できるような仕組みも用意した。その際に気をつけているのは、多忙化への配慮である。研修の成果を高めるためには教師自身の余裕も必要であるため、最小限の労力で最大の効果を得られるよう業務の改善や省力化も心がけている。

また、これまでの活動により、教師（同士）が学ぶ（学び合う）姿を見せることで生徒の姿勢が変わる、教師の授業力が上がると生徒は敏感に気づく、ということが分かった。以上のことをふまえると、我々の授業改善は生徒の学力に直結するものであるため、今後も生徒・教師の状況にあわせて改善しながら、この活動を継続していきたいと考えている。

